

生涯学習情報紙

発行：大和村教育委員会事務局・中央公民館

2026

第385号



公民館講座紹介(島口遊び講座)

講座紹介シリーズの第5回は、12月11日(木)に開催された島口遊び講座の様子を紹介します。この講座は、月1回のペースで開催されており、講師は、役場総務課に在籍の和泉豊一さんです。

この日は、特別ゲストの郁島信介公民館長を招き開催され、館長から島口の酒(セヘ)の由来や足(ハギ)の説明等を受け、奄美の方言の温かさや奥深さを知ることができました。また、和泉講師の島口はリズムが心地よく、意味が完全に分からない部分があっても、不思議と情景や感情が伝わってくるのが印象的でした。



学芸員の大和村 あまくま訪ね歩き



毎月19日は『育児の日』
第3土曜日は『青少年育成の日』
第3日曜日は『家庭の日』



奄美大島の集落空間

昭和44年(1969年)に刊行された『名瀬市誌』上巻の中で、歴史編の執筆を担当した大山麟五郎氏は、奄美大島のシマ(集落)ができあがる「道具だて」について説明しています。

シマ(集落)には、必ず「聖林」「聖泉」「神道」「広場」「神屋」の五要素があり、それらが骨格となり、集落の空間を作り出しているのだといいます。

各集落の背後には、神山があります。ひとつだけではなく、複数の神山がある場合もあります。これが聖林に当たります。

その神山には神道が通じていて、神山の麓には「イジュンゴ」等と呼ばれる湧水があります。正月の若水を汲む場所に当たることも多いです。これが聖泉に当たります。

神道は集落の中に伸びていて、集落行事を行う広場に繋がります。現在、各集落の広場には、だいたい集会所(公民館)が建てられていて、その前に立派な土俵があります。奄美大島中部から加計呂麻島の集落では、この広場をミヤーと呼ぶ事例が多く認められます。

その広場に隣接して、かつてノロの神役(女性)が住んでいた屋敷(屋敷跡)があります。その屋敷はトネヤ等と呼ばれています。集落の中にトネヤが複数ある場合もあります。また、トネヤに近接して「アシャゲ」と呼ばれる建物がかつては建てられていたと聞きます。壁がない柱だけの不思議な建物です。加計呂麻島にはまだアシャゲの建物がいくつか残されています。これらが神屋に当たります。

奄美大島の集落は、自然地形に応じて、さまざまな形態に営まれています。しかし、どの集落にも神山があり、神道があり、祭りをを行う広場があり、トネヤ・アシャゲの神屋があるのです。そうした空間構造が、どの集落にも認められるということが重要な特徴です。

それらは、いずれもノロ祭祀の聖地として神聖な場所なのです。シマ(集落)は祭祀空間として設計されています。それは、今から500年ほど前、琉球国統治時代(那覇世)の時に行われた古代の都市計画事業だったのです。それを大山麟五郎氏は、「古代集落の道具だて」「シマだての骨格」と呼んだのです。

奄美大島の集落空間の成り立ち

